

野菜

【アスパラガスの管理】

1 露地作型の管理

4月中下旬頃から露地のアスパラガスの萌芽時期となります。ただし、若茎は0℃前後で凍霜害や低温障害を受け、変色や穂先の曲がり、傷果の発生が多くなります。さらに、低温にあたる時間が長かった場合は、変色・脱水症状により、しおれて出荷できない状態となります。この時期は凍霜害が想定されるため、天気予報や霜注意報に十分注意するとともに、被覆材によるべたがけ、トンネルがけにより被害軽減を行いましょう。



写真1 穂先が曲がった若茎

ポリフィルムなどの透過率の高い資材だけでは夜間の放射冷却を抑制する効果は小さいため、地表付近の空気の流れを遮ってしまうことでかえって凍霜害を助長することがあります。被覆する際には保温マット（タフベルなど厚手の被覆材）と組み合わせて保温しましょう（図1）。

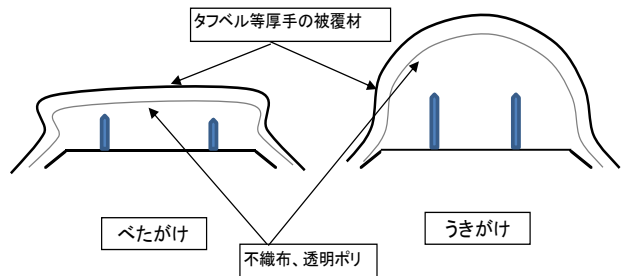


図1 被覆材のトンネルがけによる保温

なお、凍霜害を受け、回復の見込みが無い場合は養分を消耗するので、できるだけ早く被害茎を地際から刈り取り、次の萌芽を促しましょう。

2 半促成作型の管理

半促成アスパラガスは、収穫打ち切り～立茎時期に入ります。前年、病害の多発したほ場では養分蓄積が少ないため、収穫しすぎないように注意しましょう。春どり打ち切り時期の目安は、①1日の収穫量が最盛期（ピーク）の30%位に低下した時、②頭部の穂先が開きやすくなってきた時、③斜めや曲がった若茎が多くなってきた時、④M級や細い茎の発生割合が多くなってきた時などになります。

長期収穫作型では、春どり打ち切り時期に比べて2～3週間程早めに余裕を持って収穫を打ち切りましょう。また、株が弱っている場合や3年生までの若い株も株が衰弱しやすいので、余裕を持って収穫を打ち切りましょう。

立茎する茎（養成茎）の太さは10～14mmで、太くなりすぎないように注意します。立茎本数は春どりのみの場合は株あたり7～8本、長期どりの場合は株あたり5～6本を目安とします。立茎は、鱗芽群ごとに1本ずつ、適度な間隔（握り拳が入る程度）で養成茎を立てます。養成茎の間隔が狭くて重なる場合、光合成による養分供給の不足、風通しの不良から病気の発生を助長するので注意して下さい。



写真2 養成茎は、適度な間隔で立茎

【施設果菜類の温度管理】

3月は気温が高めに推移し、生育も早まっている場合もあり、4～5月にかけて凍霜害や気温の急激な変化が懸念されます。

また、外気が乾燥しやすい時期でもあります。施設栽培では換気による乾燥、着果や果実肥大によりかん水が必要となります、草勢に応じて、温度及びかん水管理に留意願います(表1)。

表1 主な果菜類の生育適温の目安(単位:℃)

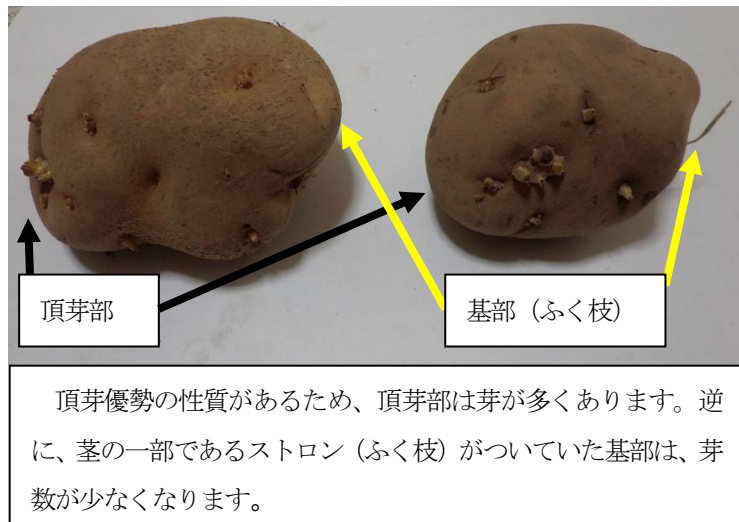
品目	昼気温		夜気温	
	最高限界	適温	適温	最低温度
キュウリ	35	25~18	15~12	10~8
トマト	35	28~25	17~13	5

出典：県野菜栽培指標

【ジャガイモの定植】

1 種イモ準備

種イモが 60g 以上の大きなものは、植え付け 1～2 日前に縦切りします。優勢芽が頂芽部に集中するので、必ず頂芽を上にして 2～4 個の芽がつくように切ります。60～100g が半切り、150～200g が四つ切にして、1 個 40～50g にします。温度 17℃ 前後、湿度 90% 前後で、切断面のコルク化が進むので、イモ切り後は風通しのよい冷暗所に保管します(直射日光が当たるところではコルク化が遅くなるので避けてください)。



2 植付け

植え付け時期は、標高 400m の善光寺平が 3 月下旬、標高 600m で 4 月 5 日頃、800m で 4 月 15 日頃、標高が 100m 上がるごとに 5 日ずつ遅らすのが目安です。極端な早植は土壌の凍み上がりによる凍害の危険がありますが、少々の早植えならばジャガイモは低温に比較的強い作物なので、凍霜害を受けても遅植えするよりも収量が上がります。

栽植密度は、「男爵」の場合、うね幅 60～70cm、株間 30cm が標準です。「メイクイン」の場合は、塊茎が露出しやすいので、うね幅、株間(35～40cm)を標準より少し広めにとり、培土をしっかりと行います。種いもの切り口を下側にし、土を 5cm 程度覆土します。凍害を受けやすい地帯では、8cm 程度のやや深植えとします。



3 土寄せ(培土)

萌芽は植付け後 20～25 日頃に始まり、土寄せは、萌芽開始期と萌芽後 15 日の 2 回行います。

1 回目は萌芽始期(ほ場全体の 50～60% が萌芽した時)に、芽の上に 3cm 程度土寄せします。生育が揃い、収量の増加、雑草発生の抑制、防霜の効果もあります。

2 回目は萌芽 15 日頃に、うね立てする要領で株元に土寄せを行います。倒伏防止、乾燥防止、土壌への酸素供給、ふく枝の確保のために行います。2 回目の土寄せの際に追肥(1a 当たり追肥量の目安は、基肥の残り窒素 0.5kg、加里 0.5kg)を施用します。